

漢字と文化

漢字文化の全き継承と発展のために

京都大学 21 世紀 COE 東アジア世界の人文情報学研究教育據點

第 11 号



完成した牌匾（2006年3月10日金坂撮影）

目次

マラッカで見た「漢字文化の継承と発展」の一齣 金坂清則	2
-----------------------------------	---

マラッカで見た「漢字文化の継承と発展」の一齣 —「福章工芸美術品公司」から知り得たこと—

金坂 清則

マラッカ訪問—はしがき

2006年3月8日朝、私は、マレー半島北西部に浮かぶペナン島の主都ジョージタウンにもっと留まっていたかと思いつつ、バスでクアラルンプルに向った。距離は約350キロ。目的地はその先約150キロのマラッカ。首都の卓越性のためでもあろうが、マラッカへの直行便は夜しかない。

1826年から1957年まで英国の海峡植民地だったシンガポールとペナン、マラッカの都市構造や都市景観を、都市史や生態環境も踏まえ、また、歴史資料としての旅行記の有効性を示しつつ、『『ヤンゴン—ハノイ』トランセクト』との比較という視点から明らかにするのが今回の訪問^(注1)の目的であり、特にマラッカには、都市史の重層性という点で、他の2都市にはない面白さがある。ここは約1世紀間マラッカ王国の都^{みやこ}であったのち、16世紀初期から、ラッフルズによる都市建設によって急速に発展したシンガポールに取って代わられる19世紀前半まで、ヨーロッパ列強がマラッカ海峡の拠点とした港市である。

英国による植民地開発の展開を歴史地理学的に考えるには、重要な役割を果たした鉄道に乗って沿線の風景と生態環境を観察していく方が望ましいのだが、マラッカが鉄道路線から外れ、それとの接続も悪い上に、「不通箇所もあるので、その日程なら避けるべき」との現地関係者の助言もあり、計画時点で断念した。

バス会社は確実に配慮して選んだ。だが、30分近く遅れて現われ10時に出発したバスは、高速道路に入るとすぐに警察の検問にひっかかり、さらに40分以上も遅れた。何台もの車がひっかかっていた。免許証に問題があるようだ。急速な社会変化に関わることもかもしれないという思いが頭をかすめたが、その時は、この思い以上に行く先を案じる気持が強かった。けれども、幸いなことにその後は順調に走り、クアラルンプ

ル中心部の長距離バス駅に着いた。

独自のきちんとした駅施設をもたない日本の長距離バス乗場とは異なり、長距離旅客輸送もバス交通が担うこの国らしい大きなバス駅（アンカラのものほどではないが雰囲気は類似）の雑踏の中でマラッカ行きの切符を慌ただしく買って乗り込んだバスは、既に満席に近く、定刻3時30分に18番線ホームを離れた。そして、夕方にはマラッカの長距離バス駅に着いた。これまたトルコの地方の小都市のものによく似た感じだった。

途中、ペナン—クアラルンプル間と同様、鬱蒼と茂る豊かな熱帯雨林を伐採して開発が進められ、近年はヤシ（パーム）油の需要の急激な増大によってアブラヤシの林（農園）が卓越し拡大している様子が観察できた。この急激な変化によって本来の生態系と環境への悪影響も大きな問題になっている。働く人の人権にまつわる問題の存在も指摘されている。高速道路から地道に入ると、風景に、人々の息吹と生活が感じられるようになったが、言うまでもなく、アブラヤシの林が卓越する風景もまた人々の生活と深く関わっている。

地理学に携わる旅の愛好者として、タクシーでなく、安くて現地の人々の息吹も感じられるミニバスやバスに乗るのを常としているのでその乗り場へ行った私は、停まっているバスに驚いた。見たこともない旧式の日野製だった。それだけに、料金を払うと、アロハシャツを着、野球帽を後向きに被った運転手が切符をくれたのには、安さ（60マレーシア・セン＝約20円）にもまして、自由な服装とは裏腹な、きちんとした、また、ミニバスでは、その必要も、事実、見ることもないシステムの存在が窺われ、興味をそそられた。運転手とハンドル、ブレーキ、ギアとの、互いに気心が知れているかのごとき動きも、見ていて心地がよかった。使い込んだミニバスと同じだった。

マラッカの第一印象

1710年にポルトガル人が建てたセント・ピーター教会の手前のホテルに着いた私は、街のおおよその広がり特徴を掴むためにすぐに、簡単な地図のついたガイドブックとカメラを手の外に出た。ところが、オランダ植民地時代の支配の拠点だったスタダイスではさすがに観光客の姿を少し見かけたものの、そこに至るまでの町並みには予想したような賑わいはなかった。ジョージタウンとは逆で、マラッカには期待が大きかっただけに、停滞的でくすんだ地方都市の雰囲気にながっかりし、同時に、出発前に読んだ文献^(注2)にも類似の指摘があったので、なるほどと納得もした。

このような第一印象は、3日後の土曜日(10日)に、これを完全に覆す活気溢れる状況を目にすることによって浅薄だと気づき、文献も鵜呑みにせずに済んでほっとするのだが、少なくともこの時は、時間の関係もあって、活気と無縁な風景という印象は否めなかったし、この状況は、海に向かって進み、埋立地らしい所にホテルやコンクリートの建造物が立ち並ぶ殺風景な市街地に入ると、より顕著になった。

127年前の1879年1月21日に海路マラッカに入ったイザベラ・バード——私がこの15年以上研究してきているすばらしき女性旅行家——が魅惑的に描いた^(注3)海と海辺は陸地に取り込まれ、かつての海岸線の付近には当時を彷彿させるものもなかった。後退した海までの距離はそれほどないはずだが、前方には人工的な砂山がうず高く横たわっているのが見えた。それで、暗くなってしまったこともあり、さすがに海辺に出るのは諦めて戻ることにし、「開発の失敗？」という憶測を胸に、不粋極まりない高速道路の高架橋の下を再びくぐりスタダイスに向かった。その時には、ボール蹴りゲームをする子供たちや街角の小さな店に佇む人影も目に入ってきて、「新興住宅地の性格も併せもつ地区かもしれない。即断は禁物」と思い直しもした。

数台のトライショーが時計塔の辺りにたむろするだけでひっそりしたスタダイスに戻った私は、次に、往時の港にとって必須の存在だったマラッカ川に架かる橋(金声橋)を渡り、ポルトガル時代以来メインストリートをなすハン・シュバツ通に入った。川を境に左岸が行政地区、右岸が商業地区(チャイナタウン)という構造は植民地時代を通じて変わらず、当時の市街

地は今、歴史的核をなしているという理解をして訪れた私であったが、この通りも暗く、ショップハウスの多くは伝統的な板戸を下ろし、人通りもほとんどなく、「活気に満ちた夜の中華街」という私のイメージとはかけ離れ、市街地を歩き出した時の印象が続いた。バードが「マラッカはどの点から見ても限りなく中国人の都市だ」と記したことの記憶が私の中華街イメージと重なり合い、驚きがいや増した。

それで、既に8時半を過ぎていたこともあって、これ以上先に進むのを諦め、通りに面した比較的大きな、といっても大衆的な食堂で夕食をとった。出てきたものは期待していた中華料理の味とは違った。考えてみれば尤もなことである。エディンバラに近年できた中国料理店で同じような経験をし、出身地を店員に聞いたらマレーシアと答えたことを思い出した。

地元の果物を食べるのを旅の楽しみと旅先での元気の素にしている私は、ホテルに戻る途中、店を探した。だが、インド系の人々が経営する店が軒を連ねる、マラッカ川左岸のラクサマナ通に果物屋はなかった。スーパーマーケット風の店はあったが、そこでも売られていない。都市の機能分化の一例と理解でき、興味深い。

「左に折れて行くとあるよ」と店の人に教えてもらって少し行くと、小さな電灯をポツンと灯した薄暗い屋台にバナナと柑橘類がほんの少しあるのが目に入った。教えてもらった店がこの屋台店のことなのかどうかはわからなかったが、この時の私にはこれを確認する必要はなかった。木にぶら下げてあるバナナを迷わず買った。1本1本は小ぶりだが1kg以上もある一房がわずか1.5マレーシア・リングギット(約46円)！安さに驚いた。しっかり者の感じがする若い奥さんは傍らにいた夫や^{しゅうと}舅らしき男性を横目に「明日が食べ頃よ」と片言の英語で教えてくれた。2人の男性は私に向かって微笑んだ。

日本のコンビニやスーパーでは聞くことのできない言葉がうれしかった。「千円からいただいてよろしいでしょうか」などという不自然で不快な言葉を、教え込まれた機械のごとくに発しつつ、「置いてあるモノ」を「カネ」と交換するに過ぎないようなコンビニのレジ係とは違って、自ら仕入れそれを売ることによって生まれる、売っている物への愛着と知識が前提になった、「買ってくれてありがとう」という気持が伝わっ

てくる言葉だった。夜遅く暗闇に突然現われた異邦人に対する警戒感ではなく、歓迎の気持が感じられた。

長いはしがきの理由

こうして3月8日の旅を終えた私は、ポルトガル人によって1511年に築かれたサンチャゴ砦の訪問や歴史博物館・建築博物館・メラカキリスト教会での調査をひとまず終え、再びチャイナタウンに入った翌9日の夕刻前以降、マラッカの歴史的な街の魅力に惹かれていった。そして、偶々出会ったある工房に纏わる事柄は、本COEが掲げる「漢字文化の全き継承と発展のために」から「全き」を除けば、それによく通じるように思われた。「本COEの課題はフィールドワークによって初めて明らかになる、文献化されない世俗的な事柄とも無関係でなく、このようなことも研究テーマにすべきであろうし、『漢字文化の継承と発展』の問題は、文献の世界の問題、歴史的な問題、純学術的な問題だけではすまないはずである」との思いの一端を伝え得るのでないかと思った。そして、そのような思いが帰国後も続いていた折に「本誌に何か執筆を…」との依頼を受けたので、本誌にまとめることにした。

長々した導入を綴ったのも、どのような状況下でこの小文の基になるものと出会えたかを記しておきたかったからである。

チャイナタウンの工房

私が福章彫刻貿易という名の店先に立ったのは、マラッカに到着して3日目、3月10日の午後だった。前日(9日)のチャイナタウン再訪時に、ハン・ジュバツ通よりも一筋海側のトゥン・タン・チュン・ロック通において、中国文化とマレー文化の折衷文化であるババ・ニョニヤ文化の香りのする、趣ある家並みや骨董屋の多い静かな佇まいの町通りの、停滞的とは明らかに異なる、歴史が醸し出す独特の魅力に惹かれ、ポルトガル人の末裔としてのアイデンティティをもって活躍するロバート・ケネディ氏との出会いも楽しんだ私は、10日には、建築博物館での興味深い資料との邂逅や、館長ほかからいただいた親切、ケネディ氏の案内によるポルトガル村^(注4)訪問、さらには歴史博物館見学によって、いっそうマラッカに対する興味を掻き立てられた。片面が縮尺1万分の1の市街図(図1)になった地図も買えたし、前日、バードも訪れたサンチャゴ砦で手に入れたスタダイスとマラッカ川の古写

真のプリントも、何と、初めてのアジアの旅としての日本の旅を成功させたバードがその帰国の途次にマレー半島の旅を敢行し、マラッカを訪れた翌年（1880年）のものだった。

だから、歴史博物館見学のあと再び1人でチャイナタウンを歩き始めた時には、2002年に世界遺産登録に向けて動きだしたこのマラッカの歴史都市地区^(注5)について自分なりのものを何か見い出したいという気持ちになっていた。福章彫刻貿易の店先に立ったのはそのような折だった。

複合社会を象徴するように、中国寺院、モスク、ヒンドゥー寺院が近接してあるトゥカン・エマス通から、この内陸側にはほぼ平行するカンボン・パンタイ通に出、再びトゥカン・エマス通に出るべく、ハン・カツリ通に入ってすぐに出会ったのが、この工房だった（図1

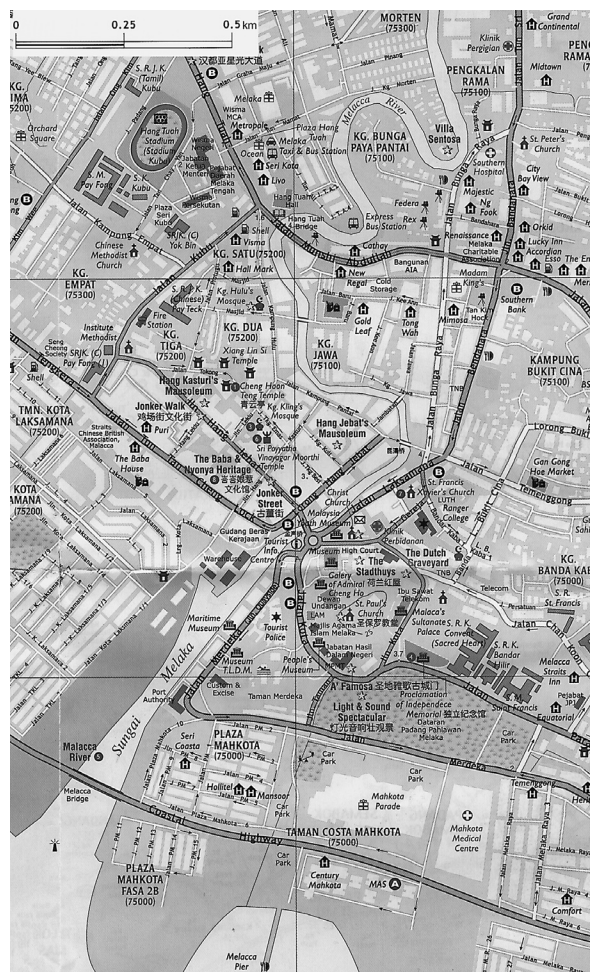


図1 マラッカ（馬六甲）市街図（*Bandar Melaka, City Map*）にみる旧市街とその周辺（57%縮小）

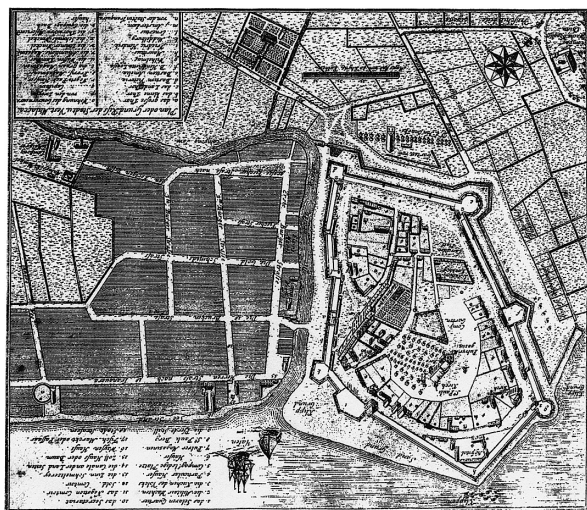


図2 1744年出版の書物*中のマラッカの都市プラン
* Johnnn Wolfgang Hedyt. *Allermeuster Geographish*, Amsterdam, 1744 (Wendy Khadijah moore. *Malaysia: A Pictorial History 1400-2004*, Kuala Lumpur, Archipelago Press, 2004)による。図1との対比のため天地を逆にして掲載)

参照)。道幅約6メートルのこの通りも1744年に出たオランダ製都市図にすでに描かれている(図2)。この銅版の都市図はオランダによって改造されたマラッカの都市プランを示すものだから^(注6)、この通りは少なくとも350年以上の歴史が刻まれた歴史の道なのである。また、海岸線に平行に走る表通^{おもてどおり}に対して、それに基本的には直行するこの道は、いわば、「筋」に当たる道であったことは、今の道のありようにも続く。

青い窓枠が引き立つピンクの建物は、レトロでありながらどこかお洒落で、1939年に建てられたことを示す数字と、「福章彫刻」「福章書店」という看板、真っ赤な提灯、それぞれの作業に黙々と励む、いかにも中国人的な顔立ちの3人の男女、そして彼らによって手を加えられつつある大きな「厚板」が、一枚の絵のように目に飛び込んできた(図3)。チャイナタウンらしい風景である。

私がこの店に強く惹かれたのには、以上のほかに3つ、4つの理由がある。

その1つは、イザベラ・バードが旅行記 *The Yangtze Valley and Beyond*^(注7)で漢口の商業街の看板について興味深い記述をし、看板の連なる商業街の写真(図4)を掲げていることである。しかも、この写真はバード自身の写真ではなく、中国写真史上の要人の1人ジョン・トムスンが撮影したものである。さらに、



図3 福章工芸美術品会社の工房兼居宅
(2006年3月10日筆者撮影)



図4 看板が連なる漢口の商業街
出典: Mrs. J. F. Bishop (1899).

この写真は、古写真によって武漢の都市史をたどる『老武汉』^(注8)にも収められていることからわかるように、貴重な写真と評価されている。

加えて、日本の場合には「暖簾分け」とか「暖簾を守る」という言葉が示すように、暖簾が商家を象徴するものになっており、「上杉本洛中洛外図屏風」はじ



図5 ジョージタウンの旧市街の町並みと看板
(2006年3月7日筆者撮影)

め都市の風景を描く作品に古くからよく描かれ、その「ゆらぎ」に看板とは異なる美意識が感じられ、日本的な歴史都市の風景の一要素をなす一方で、看板も、「看板倒れ」という言葉が示すように、大切であるのに対し、中国の場合には、看板が商家にとって圧倒的に重要で不可欠なものになっている。事実、今回の旅の最初の訪問地ジョージタウンの旧市街のチャイナタウンでも看板の目立つ風景が目をはいた(図5)。それで、機会があればその作製現場を見たいと思っていた。その機会に巡り会えたのである。

しかも、「上杉本洛中洛外図屏風」に描かれた暖簾でもそうなのだが、暖簾の場合には文字ではなくデザイン的・絵画的表現が中心で、漢字を記す場合でも漢字一字をデザインとして「描く」(図6)のとは異なり、看板の場合には漢字で表現するという性格がより強くなる(図7)。この、日本のみならず中国の看板における文字、とりわけ漢字の重要性は、ヨーロッパの看板と比べる時、明瞭である。すなわち、やはり中世に遡る古い歴史をもつヨーロッパの看板にあっては、文字(アルファベット)にもまして、全体としてのデザイン性・絵画的表現が重要であるのに対して、中国の看板にも、漢字を読めない人々の割合が高かった清代の華北以北でよく見られた望子(幌子)と呼ばれる、文字でなく形・デザインで表現する看板もありはする(注9)が、今では、概して、文字(漢字)で表現する看板、すなわち招牌(後述)が一般的であり、そこでは漢字との結びつきが圧倒的である。これは看板がトムスンやバードの関心をひいた一因かもしれない。そんな思いも脳裏をかすめた。

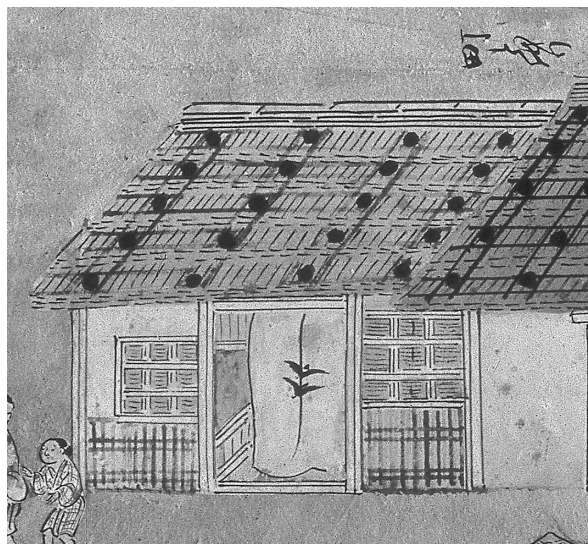


図6 「上杉本洛中洛外図屏風」(米沢市上杉博物館蔵、国宝)
に描かれた暖簾(上:右隻第三扇,下:左隻第六扇)



図7 高岡市の古い商家の看板(1997年6月14日筆者撮影)

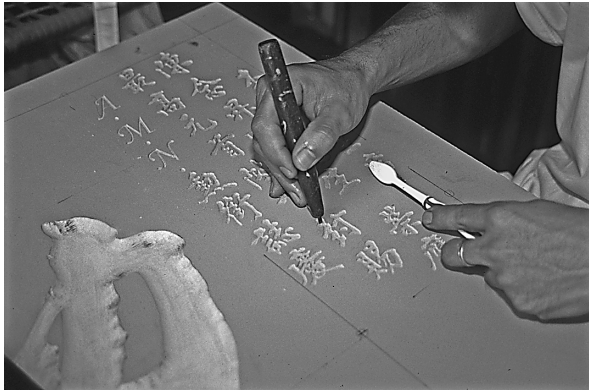


図8 青い漆を塗った厚板に彫刻する丁偉強氏
(2006年3月10日筆者撮影)

店で教えを乞う

最初は、一番手前で、左手に持った歯ブラシで削り滓を取り除きながら、青灰色に着色された厚板に書かれた文字を右手に持った彫刻刀で彫っていく男性の手の動きと整った文字を見ていた（図8）が、そのすぐ奥で、やはり丸椅子に座り、漆黒の厚板に彫られ黄色に着色された文字に金箔を貼る女性により強く目をひかれた——真っすぐに伸ばした背筋。精神を指先に集中させる真っすぐな目線。キリッとした横顔。なにかの拍子に付いたのであろう、うなじに光る金箔の細片。金箔の小さな束から金箔を一枚一枚取り、それを黄色に着色された文字の上に持っていき押さえるように貼っていく無駄のないスピーディな指の動き。絵筆で余分の金箔が取り除かれた途端に命を吹き込まれたかのような金文字と漆黒の厚板との鮮やかなコントラスト——。その様子を写真に撮りたく思った。

だが無断で撮るわけにはいかない。少し奥で幼子がこちらを見ていることからしても彼女は母つまり男性の奥さんであり、彼女の奥で布に油を含ませて最後の仕上げをしている女性は男性の母のようでもある。

そこで私は、まず男性の仕事を見せてもらったうえで改めて挨拶し、漢字（日本語）の名刺を差し出し、この仕事と工房に興味があるわけを伝え、写真を撮らせてもらった（図9）。そして「この字は御自分で書かれたのですか」と訊ねた。すると男性は「いいえ」と言って、私を店の奥に案内した。福章書店という看板の下をくぐると、表からは見えなかったが、日本の神棚のようなものの背後にある小部屋で1人の青年が韓国の代表的メーカー＝現代（Hyundai）のコンピュー



図9 黄色の漆を塗った文字に金箔を貼る丁偉強氏の奥さん
(2006年3月10日筆者撮影)

タで作業していた。主人に尋ねた文字はこれで作字したものだった。また、この青年は、ここに案内してくれた男性の弟だと思われた。つまり、先の男性が主人であり、少なくとも男女2人ずつ計4人が分業しながらこの家業を営んでいると判断された。興味が増した。

そこで私は、再び名刺を差し出し、私の名前を打ち出してもらえないかと頼んだ。すると青年は快く私の名前を打ち込んで画面に表示した上で、「金」の字についてフォントの一覧を表示してくれた。私は画面に現われたその多さに驚いた。信じられない数である。青年はあとの3文字についても同様の操作をして、それぞれのフォントを示し、「どのフォントにしますか」とジェスチャーを交えて聞いた。そしていくつかのパターンを画面上に示してくれた。恐れ入った私は、迷った挙句、最も平凡だが親しめる行書体のものに決め、その印字を頼んだ。するとすぐにキャノン（Can-

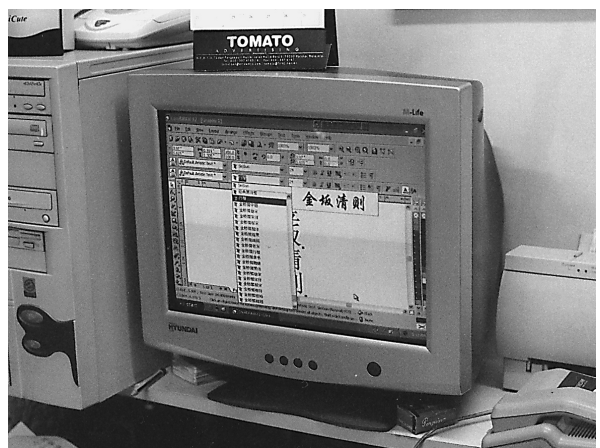


図10 印字された「金坂清則」と画面上の種々のフォント
(2006年3月10日筆者撮影)



図11 店に祀る神々 (2006年3月10日筆者撮影)

on)のプリンターで印字してくれた(図10参照)。

「協力を得て教えてもらえれば、面白いことがいろいろわかりそうだ」——こう感じた私は、お礼を言い、コンピュータ画面を写真に撮り、店の表で仕事する主人のところに戻った。戻る途中、3つの神像を祀り供物を供えた神棚状のもの(図11)の様子を改めて見て、これにも興味を覚えた。神卓(桌)というようである。こんなに大きなものではないが、ジョージタウンの旧市街では、排屋といわれる歩道の柱壁にも類似の棚があった(図12)し、この家の玄関脇にも線香をあげた同じもの、すなわち小型の神龕(図3)が設けられていて、このような「祈りの場」が、この家のみならずマレーシアのチャイナタウンに住む人々の精神世界を考える糸口の1つになると思われたからである。また、道から見たときには板に書いたように見えた「福章書店」という看板は、そうではなく、浅く彫られていることにも気づいた。なぜこの看板があるのかにも興味を覚えた。

私は主人にもお礼を言い、「ここで作製される商品にも、この仕事にも、それを行っている皆さんのことにもとても興味を覚えます。それで、写真を撮らせてもらえませんか」と頼み、「日本から質問表を送らせてもらっていいですか。教えていただけますか」と尋ねた。すると主人は「オーケー」と言いながら店の奥に入っていき、すぐに戻ってきて、「福章彫刻貿易」と書かれた名刺とカラーのレターヘッドのある便箋と、パンフレットを私に手渡した。

パンフレットは厚手の光沢紙にカラー印刷され、片面が漢字(繁体字)、もう片面が英語になっている美しく内容豊かなものだった(図13)。これを見て私は、



図12 ジョージタウンの排屋の柱壁に祀られる神 (2006年3月7日筆者撮影)

この工房が私が最初思ったような看板屋とは異なり、レターヘッドにも繁体字と英語でそれぞれ「福章工藝美術品公司」^(注10)“FWU CHANG DESIGN & SOUVENIR”と記されているように、もっと美術的な彫刻全般を行う工房であり、その対象が、小は印鑑から大は祖先牌や賀盾・牌匾に至るまで実に多様であることを知った——そういえば店先の隅には印鑑も飾ってある——。また、この主人丁偉強氏が3代目になることや、マラッカはもちろん、マレーシア・シンガポール・タイ・インドネシアやオーストラリア・アメリカ合衆国にさえ商品が収められることも知った。私にこのような額が贈られるとすると、その言葉は「学富五車」になることも教えてもらった。気持の上での距離が、一方的ではあるが、もっと縮まった。

日本には、このような大小さまざまな木彫製作を一手に行う業態も工房もないと思われる。印鑑類と看板や木額の製作販売をすべて行っている事業所は、少なくとも私は見たことがないし、看板、少なくとも私が子供の時からよく見てきた看板は、「彫る」というよりも「書く」というイメージの方が強い。

また、主人が彫る文字は漢字に限らない(図13)が、あくまでも基本は漢字であるし、^{ビジネス}商売や生活のさまざまな局面に関わって求められ作製されるわけだから、まさに漢字文化の問題として考えることができる。も

全部雕刻在一塊木上——
讓您一生永存留念

受禮者的傑出成就
送禮者的獨特品味
一千年的卓越傳統
三代相傳藝術結晶



會社在叻
RESTORAN HOOI SANN



峇家竹
Bamboo Hut Bistrot

要挑選意義深遠的紀念品來讚揚一名人士的豐功偉績，送禮者必須深思熟慮，仔細斟酌。

經過精挑細選的紀念品將能適當的刻畫出受禮者的崇高聲譽及傑出成就，還能表達送禮者的獨特品味。

福章的無價不朽傑作

福章三代相傳的木質書法是傳統文化與獨特藝術的結晶，在馬六甲聲譽卓越，遠近馳名。

您必須親身領略它的精心傑作及一千年的傳統藝術，才能從中體驗到美的感受。

每塊用來雕刻的木板都是採用免受白蟻侵襲及持久耐用的整塊正艾木。

然後再經過500個小時嚴謹製作及5個加工階段，才交給巧匠們細心雕刻。

每項藝術之作皆由經驗豐富的師傅用鑿子精雕細刻而成。每個金字都是採用99.877%純正金箔用手鍍上。

塊塊皆不同，絕不會重複。也沒有機器能複製。

這也是掛在店面的木雕裝飾經過數十年後仍然歷久如新的原因，毫無疑問這是無價的不朽傑作。

福章手藝高超的木雕榮獲本地及外國媒體讚譽，為馬來西亞最佳木雕之家之一。它們不僅使遍佈馬來西亞各地的許多建築物及辦公室的正面和大廳生色不少，而且超越國界，遠至新加坡、泰國、印尼和澳洲，甚至美國。

木質書法大師

福章專門雕刻畢生珍藏品來紀念：

- 授封勳銜及文化慶典
- 業址開張營業
- 新廈暨辦事處落成
- 結婚及生日慶典
- 週年誌慶及大學畢業
- 職員送別、升職及榮休
- 送別及回國慶典
- 新居餐會

我們也備有精心設計，種類繁多的傳統及摩登紀念品任您選擇，以增添喜慶場合的歡樂氣氛：

- 牌匾/金字招牌
- 紀念賀匾
- 古典木雕賀盾
- 雕刻複製證書
- 木質及石塊印章

本公司可代安排運交服務。

福章工藝美術品公司

87, JALAN HANG KASTURI, 75200 MELAKA, MALAYSIA.
電話：606-283 6209 傳真：606-286 2430
網址：www.fwchang.com 電郵：info@fwchang.com

圖13 福章工藝美術品公司的パンフレット (55%縮小)

もちろんのこと、複合社会を構成するマレーシアにおける華人社会の存在が前提になって成り立っている仕事である。しかも、丁氏によると、注文が増えてきているという。記念品として贈られたり、開業などに合わせて作製されることが多いことからすると、これは、この国の経済発展の進行とも関係している。

このようなことからすると、まさに「漢字文化の継承と発展」の問題の1つとしてこの工房の活動を取り上げることができる。事実、今3人が作業しているものも、すべて記念品としての額である。さらにパンフレットには文字は書家の手になると記されており、このことからするとコンピュータの導入という、技術革新との関係も問題にできる。コンピュータは本COEのキーワードの1つである。

そんなことを考えながらも、突然現れてこれ以上仕事の手を休めてもらうのは申し訳なく思われた。そこで、写真を自由に撮らせてもらい、最後に、ほぼ出来上がった扁(匾)額(牌匾：後述)を丁さんと奥さん

に掲げてもらったところをカメラに収めた(図14)のうち、お礼を言い、日本からの質問への協力をお願いして、工房を後にした。

旅のその後

フィールドワークの旅の面白さは、予期せぬ出来事との出会いにある。常々こう思いつつ旅してきている



図14 完成直前の扁額を掲げる丁さん夫妻と長女 (2006年3月10日筆者撮影)

私は、その後も翌朝も、マラッカの予期し得なかった賑わいや、街中に展開するさまざまな光景、マラッカ川沿いのかつての村の佇まいなどを観察し、写真に撮りながらフィールドワークを楽しみ、最後はトライショウに乗ってホテルに戻ったのち、長距離バス駅に出、直近の便でシンガポールに向った。そして丸3日間、旧市街地を歩いたり、真新しいシンガポール国立図書館での文献調査を行ったのち、クアラルンプル経由で帰国した。

2005年7月にフォート・カニングの丘の麓から都心の一等地に移転したばかりの16階建の国立図書館のすばらしさには圧倒されたが、目当てにしていたものの一つの古地図に限れば、そのコレクションは信じがたいほど貧弱で、このためもあってか、余り大した地図でもないのに貴重資料として管理されていた。その、保管を優先して温度と湿度を設定された特別室での閲覧は、寒さとの戦いだった。それはともかく漢字文化圏における地図の問題は本COEにとっても大切なテーマになるはずである。その点でも興味深い経験だった。

帰国後私は、撮った写真を添えた札状と共に、私の下で研究している台湾からの留学生林春吟さんに中国語に訳してもらった質問表を送った。そして、その後、手紙や電話などでのやりとりを通して、この工房の活動とそれを担う人々についての知見を得ることができた。その際には、阿辻哲次教授の下で研究し、文字と漢字文化に詳しい陳捷君（福建省出身）の援助を得た。同君の援助によって確認できた事柄は実に多く、ここに特にお礼申し上げる。以下、「漢字文化の継承と発展」という文脈に沿って記してみる。

「漢字文化の継承と発展」と福章工藝美術品公司

〔沿革〕 先にも記したように、現当主の丁偉強氏（以下、丁さんと記す）は3代目である。丁さんはマラッカ（馬六甲）、母の林雅珠さんと妻の鄭桂珍さんはマラッカ州の町で生まれたが、祖父・祖母と父は、福建省すなわち最も一般的な華僑出身地の生まれである。

祖父丁福章氏は1930年ごろに故郷の上杭^{（注11）}を出て直接マラッカに移ってきて、故郷で既にしていた本屋を始めた（既に結婚し子供もいたが、初めは、妻子を置き弟丁家章氏を伴っての移住であり、妻子を呼び寄せたのは仕事が軌道に乗ってからである。華僑の移住の一般的スタイルである）。扱っていた本は漫画など

の大衆書だった。その場所は今の工房と同じ通りで、今の店から8軒ほど離れた所だったという。現在の建物の正面上部に記された1939年というのはこの建物ができた年であり、店の奥に掛けられている福章書店という大きな看板はその当時の名残であり、福章は祖父の名からとっている。

ただ、本屋の傍^{かたわ}ら祖父は既に彫刻^{ちようこく}（雕刻）の仕事も行っており、この二業種兼業の状況は、中学校を卒業後に家業に入った父丁炳星氏の代にも続いた。また、子供の頃から家業を手伝っていた丁さんは、15歳の時（1980年）に正式にこの仕事を始め、父が1982年に現役のまま亡くなったために高校を2年で中退し、家業を継いだ。三代目の誕生である。

ただ、17歳の少年にとって経営は無理だったため、当初はこの工房で1970年代から弟子入りして働いていた15歳ほど年上の丁さんの従兄陳世聰氏^{（注12）}が中心となって家業の継続を図った。ところが2年後に丁さんが家業の中心的役割を果たすようになると、それに呼応するように、陳氏は訪問販売業への転身を希望し、丁家の家業から抜けた。しかし、それから5年後の1990年には高校を卒業した丁さんの下の弟丁偉興氏が家業に就くことになり、家業の態勢は逆に強化された。

こうして彫刻業への比重を高めていくのに伴い、丁さんは1992年に本屋を閉じた。この家業の将来性を見越しての選択だった。さらに2002年からは、1999年に結婚した妻鄭桂珍さんもこの仕事に従事するようになり、陣容はより強化された。

〔分業の実態と家業の維持〕 私が訪れた時には丁さんが彫り、母と妻が漆黒の厚板に彫られた文字に筆で黄色の液体を塗ったり、金箔を貼ったりし、弟がコンピュータにより字体を決める作業を行っていた。そのためこれが分業の実態だと思っていた。しかし、質問表の回答には、この道に入ってから25年の丁さんは、「文字の彫刻と牌扁の品質管理を担当し」、経験年数が40年と最も長い母は「金箔の押し貼り以降の工程を担い」、また、経験年数が4年の妻は、「パソコンによる文字の処理を分担し」、同15年の弟は「印鑑（印章）や祖先牌・神印の彫刻をする」と記されていた。

そこで、この食い違いについてさらに尋ねた。

その結果、彫刻は丁さんが主に担当し、母は熟練を要する金箔の押し貼りを主に行うが、完全な分業体制

はとっていないことがわかった。そのため私は、妻が金箔貼りをする様子を目にしたのである。私には実に手慣れたように見えたが、母から手ほどきを受けてまだ数年を経っていない。言うまでもなく、どの工程も重要であるが、特にこの金箔貼りは熟練を要するわけで、この工房では、結婚してすぐにこの仕事に就き、70歳の今日まで仕事を続けてきている母から妻への技術——技と知恵——の継承がスムーズに実現した。

さらに、私の訪問時にはこの4人が働いており、前述の書家の存在を別とすれば家内労働型だと思っていたが、その後の調査で、実際には2人の男性を雇っていることもわかった。尤も、その仕事は雑務であり、将来的にも技術を教え、学ぶという予定は、自他共がないという。仕事が忙しくなったので近所の若者を雇ったという^(注12)。

というわけで、基本的には家族労働型のビジネススタイルをとっている。そしてこのスタイルの維持にはもう1人の人が関わっている。それは丁さんの2歳年下の妹丁美慧さんである。彼女は結婚してこの工房から車で30分ほどの雙溪烏浪という所に住んでいるのだが、かなりの頻度でやってきて家業を手伝っている。ただ専門的なことはしない。

【文字と彫法】 この工房でコンピュータによる作字を行うようになったのは1999年からであり、それ以前にはすべて3人の書家に字を書いてもらっていた。3人ともこの工房の近くに住んでおり、だれに書いてもらうかは、主として、楷書・隸書・草書という書家の得意な書体の違いによって決まる。行書体の場合は楷書の書家も草書の書家も対応できるのでいずれにも依頼する。しかも、このような書家に依頼するやり方はコンピュータの導入によって終わったわけではない。今でも、顧客が書家の書く字を望む場合が全体の約7割までを占める。書家が書くのとコンピュータにより作字するのでは価格がかなり異なるが、あくまでも美術品と位置づけられること、二つと同じものがない点が重要であることもあって、書家が書く作品の需要の方が大きいのである。

書家に払う報酬の単価は書体によっては変わらず、文字の大きさと量によって決まる。記念品の場合、主たる文字は4字構成なので、それが支払う額の基準になる。また、顧客が既存の気に入った書作品を持ち込ん

で字を決めることもある。

パソコンの場合、書体は隸書・楷書・行書と魏碑^(注13)の4種類があるが、フォントは、私も見たようにきわめて多い。また、高い芸術性が求められる草書体は今でもほとんどが書家が書く。

なお、私が訪問した時には、文字はすべて彫り込まれていたが、彫刻の仕方すなわち彫法はこれだけではない。このように文字の部分の彫り込む沈彫の他に、逆に文字を浮き上がらせる浮彫と、彫る深さ・浅さの差異を強調し、躍動感を出す芸術彫の3種類がある。このうち最も多いのは私が目にした沈彫で、これが6割を占め、次いで芸術彫が2割強を占めるという。

【製品の種類と工房の業種・業界】 製品の種類はパンフレットにもあるように多岐に及び、伝統的な対聯や賀盾、木彫賞状・印章・祖先牌・神印・「記念品」・金字招牌など多岐に及ぶが、印章や祖先牌は減っており、逆に牌匾が増え、これが売り上げ全体の6～7割を占めるまでになっている。

つまり、顧客が求めるものの変化に対応して製品の構成を変化させながら家業を発展させてきているのであるが、ここで私にとって最も興味深かったのは金字招牌である。それは、招牌とは看板のこと、金字招牌とは板に彫刻した文字に金箔を押し貼った金字の看板のことであり、従ってこの工房は看板屋ではないが、中華世界における最も伝統的でオーソドックスな看板の作製とも無縁ではないことがわかるからである。つまり中華世界の看板を求めてこの工房に最初私が心ひかれたのは完全に間違っただけなのである。

この金字招牌については、パンフレット(図13)にも例示されているようにレストランの他、会館や政党などからも注文があるという。ただ、商店や事業所のいわゆる看板としては、今ではマレーシアでもコンピュータで作製された、「彫刻」とは無縁な招牌、すなわち広告牌が一般的になっており(図15参照)、伝統的な金字招牌はこのような消耗品の看板とは異質な価値を備えたものとして独自の存在感と需要をもっているのである。従って、このような金字招牌を作製する丁さんのような工房とコンピュータで作製し、光沢のあるフィルムに印字した招牌を作製する事業所は、全く別の業界に属し、後者の事業所は広告店という(後述)。丁さんのような工房が属す業界をどのように呼



図15 コンピュータで作製された看板(2006年3月10日筆者撮影)

ぶのかという私の質問については、丁さんはそのようなことを考えたことがなく、このため回答を得るのが難しいという予想外の結果だったが、牌匾業とは言わず、敢えていうなら彫刻業であるという回答は、木に彫刻するというのがこの工房にとっていかに本質的であるかということをよく示している。

招牌についての説明が長くなったが、次に、神印とは神の名を彫り込んだ印鑑であり、道観で使う。信者はこれを捺したものをもらって大切にする。これは、賀盾や、中国の古い民家の入口の両側に普通見られる紙に書かれた対聯に通じる木彫の「対聯」と共に、中国的なものである。これに対して「記念品」というのはもちろん製品の種類ではなく、種類に無関係に記念品として贈るものをいい、近年は、自分や自分の家のために注文するケースよりも記念品として注文するケースが圧倒的になってきているという。そのような動向の中でこの工房は家業を発展させてきており、牌匾のウエイトが高まってきている。

ところでその牌匾であるが、牌とは特に縦長の札も意味する牌と、横長の額のことである匾の合成語であり、後者の意味である扁額よりも幅が広い意味をもっている。日本語としては定着していないが、中華世界では一般的な言葉として定着しており、扁額の意味にもなり、商家の看板すなわち招牌の意味ももっている。

なお、現在、マラッカには丁さんのような工房が全部で3軒あるが、この工房が一番古い。また他の工房との間に親族関係はなく、同業組合もないとのことである。祖父と共にマラッカで本屋兼彫刻業を営んでいた祖父の弟丁家章氏は、後に、マラッカの東に隣接す

るジョホール州のムアール（麻坡）県に移動し、1968年ごろに亡くなるまで彫刻業を営んでいたが、その子供は菓種業に転じたという。

このような丁さんの家業に関して興味深いのは、彫刻業の世界では同業組合はないが、もっと広い広告業の世界には、「馬六甲廣告同業公會」という同業組合があることと、3軒の工房のうち丁さんの工房だけはその組合に加入しており、しかも、丁さんはその組合の理事という要職を勤めていることである。

おそらくは、本来は丁さんの工房のような彫刻を基礎におく業界があり、そこから彫刻を伴わない招牌を作製する事業所が分化していったという経過があったのであろう。

【顧客と売り上げ】 1週間に作製できる点数は、製品の種類や大きさのほか様々な状況に規定されるので一概に言えないが、1週間に3～6点であり、6点を超えると品質低下を招くのでそれを超えることはない。

作品＝商品はすべて受注生産であり、注文は、パンフレットにも記されているように、マラッカやマレーシア国内の他、シンガポール・インドネシア・タイ、さらにはアメリカ合衆国やオーストラリアからもある。ただ、アメリカ合衆国やオーストラリアの場合は、その居住者から注文があるわけではなく、旅行者が店を訪問した折に注文する。また、最も多いのはもちろんマラッカであり、全体の約60%を占め、次いでその他の国内が30～35%である。海外の割合は5～10%にとどまる。国内の場合も、注文にあたっては来訪せず、電話その他の通信手段による場合も少なくないという。また、かつての顧客などの人的ネットワークが関わることも少なくないという。

月によって売り上げ額はかなり異なり、平均の売り上げ額を示すのは難しいが、10年前に比べて注文件数も売り上げも増えている。それは、先に指摘したように、経済発展の過程で生活が豊かになり、芸術品としての木彫品を求める需要が大きくなってきていることにもよるし、丁さん自身が中華の伝統文化の一つとしての牌匾の意義と魅力を積極的に啓蒙してきていることの効果もある。

【原材料としての原木と金箔】 この彫刻業の成立によって忘れてならないのは高品質の製品の製造に不可欠な良質の原木がマレーシアで豊富に産出されることで

ある。製品として100年くらいはもつことが求められ、それに耐えるには樹齢80年～100年の木が必要である。木の種類は波羅木、正艾木と山桂木の3種類にほぼ限られている。

このうち波羅木（merbau）はマレー半島を含む熱帯アジアと太平洋諸島に広く分布するマメ科タシロマメ属の、時に大高木になる木で、和名をタイヘイヨウテツボク、英語名を Malacca teak といい、木理が緻密で耐朽性・抗虫性に富み、家具・高級建築用材・楽器・電柱その他に用いられる代表的有用材である。

正艾木は学名をチェンガル（cengal）といい、ほとんどマレー半島の低地にのみ生育し、樹高60 m、直径2 m 前後に達する大高木で、重硬で耐朽性に富むため第一級の有用材をなし、船舶・車両・電柱のような重構造用材に用いられるとともに、加工しやすく光沢もあり抗虫性にも富むため、家具・木彫の素材としても有用で、乱伐が進み蓄積が減ってきている。パンフレットの表紙を飾っている美しい厚板はこの正艾木であり（図13）、丁さんの工房ではこの木を最もよく用いる。

最後の山桂木（merawan）は同じくフタバガキ科に属し、マレー半島やボルネオ・スマトラ島に分布する小～中高木で、耐朽性・抗虫性・耐水性が大きく、材色美しく油脂状光沢に富み、かつ、比較的軽軟にして緻密なため、船舶・建築資材のみならず家具材としてすぐれている^{（注14）}。

尤も、この工房ではこれらの原木を購入するわけではなく、板の状態で購入する。板のサイズは20フィート（6メートル）×3フィート（90センチ）と決まっており、製品が小さい場合はこの工房で切る。

購入先の木材会社は十数社ほどあるが、そのうちマラッカには2～3軒しかなく、他は原木の生産地域であるパハン州に所在する。つまり原板業者は圧倒的に原料立地である。そしてマラッカの材木商を通じて購入することもあるが、多くは電話による直接注文である。これらの会社とは長い取引関係で結ばれている。また原木はケランタン州でも得られるが、その場合の原板もパハン州の業者から購入する。

購入する板は十分に乾燥したものではない。従って、乾燥は自分の工房で行う。ただ、自然乾燥だと何ヶ月もかかるので、専門の業者に依頼することもある。この業者はマラッカにあり、1ヵ月で乾燥してくれる。

また、板は常時3～6ヵ月先の需要を見越してストックしてあるが、必要な板をスムーズに購入するためもある。上記のように、多くの業者と取引している。

ところで、木彫品にはすべて純度99.877%の金箔を貼り、金字にする。その意味で金箔も不可欠な原材料であるが、これは板とはまったく違い、タイ・中国・香港の業者から直接仕入れる。一昔前にはタイからの購入が最も多かったが、最近では、仕入価格の関係で中国が第一の購入先になっている。

金箔のサイズは2インチ（5.4センチ）×2インチと決まっている。そして大・中・小3つのサイズの箱に入っており、それぞれ100枚、1,000枚、10,000枚入りである。もちろん使用する金箔の量は価格を左右する大きな要素になっている。大きな文字だと100枚くらい使う。価格は100枚入りの小箱で約60リンギットである。

【工程】工程は十分に乾燥した厚板に水色の漆を塗ることから始まる。これによって表面を滑らかにする。次に板に字を書く。手書きの場合は、書家が直接木に書く方法と、書家が紙に書いたものをカーボン紙をあてて木の上に輪郭をトレースする方法があるが、多いのは後者である。また、コンピュータによる場合は手書きの後者の方法と同じである。

次に、書いた字を彫刻する。図8と図16はこの段階のものである。パンフレット（図13）にある「木質書道大師」とはこの彫刻をする人つまり丁さんのことであり、その重要性が窺われるが、丁さんによると、最も重要なことは書かれた字と彫刻とのバランスが十分にとれていることである。この点を強調する丁さんの説明には、家族以外の要素であるがゆえにいつそ書家との呼吸・一体性を大切にせねばならないという姿



図16 彫刻を終えた牌匾（2006年3月10日筆者撮影）



図17 金箔を押し貼った文字とその前の黄色の漆を塗った文字 (2006年3月10日筆者撮影)

勢がよく示されている。

彫刻が終わると、次に工具やサンドペーパーを使って木の表面に磨きをかけ滑らかにする。そして字の部分には黄色の漆を、その他の部分(地)には黒の漆を塗る(図9参照)。地の部分はこの黒の漆が圧倒的だが、赤と青の漆にする場合もある。尤も、漆自体は100種類も備えられており、あらゆる色に対応できる。

次に字の部分に、金箔を押し貼っていく(図9、図17参照)。最後に特殊な油で拭いて光沢だしをして、完成となる。

【製品の書誌的説明】 次に写真に撮った作品について若干説明し、これまでの記述を補足する。

まず図16(図8参照)はマラッカのある神廟の副主席がマレーシア国王から称号を賜ったのを記念してその理事会が贈呈するために注文したものである。その注文があったのは私が訪れた2006年3月10日の直前の6日であり、牌匾に記されている日に引渡された。彫刻自体には3~4日を要した。制作日数は10日ということになる。「功績彪炳」とは功績が明らかであるという意味であるが、この文言は注文主である理事会が決め、字体は丁氏が決めた。価格は1,000リンギット、日本円にして約3万円である。

次に、法曹界のすぐれた人という意味である「法界精英」と彫った図14は完成直前のもので、事実、私が訪れた10日の翌日に納品された。言葉・字体ともに発注者が決めた。作成に要した日数は約10日である。サイズは図16のものとほぼ同じだが、字数などの関係で約1,300リンギットと少し高い。この発注者もマラッカの8組の夫婦と1人の女性の計17名で、職業はわから

ないが、贈り先は弁護士陳文迪氏で、その法律事務所の開所祝いとしての記念品であることから、弁護士の世話になった人々だと推察される。

最後に図18(表紙写真)は完成したもので、発注者は清靈宮というマラッカの道観の理事会であり、2月中旬に注文を受け、3月11日に納品された。注文から1ヵ月近くかかったことになるが、実際の作製日数はやはり10日ほどである。「雄弁」という意味である文言は、字体ともども発注者が決めた。価格は約350リンギットである。この牌匾で興味深いのは贈り先が図16のものと同一弁護士陳文迪氏の法律事務所であり、同氏が清靈宮の法律顧問をしている関係で同じくその開所祝いとしての牌匾である点である。

なお、以上、私が見たのはすべて贈り物だったが、自分の家に飾る場合には、当該苗字の望族の出身地の地名すなわち郡望を記するのが一般的で、たとえば陳姓の場合だと潁川と書き、林姓の場合だと西河と書く。

このように、実質作製日数は約10日であり、ぎりぎりの日程で作製・納品が行われている。また同時に作製する点数は、品質確保のため最大6点程度である。近年は恒常的な注文が続き、時期的な変動もあまりないという。乾燥の方法やコンピュータによって作字した字の採用など近代化を推し進めながら、また近代化する伝統的華人社会の需要に応じながら、伝統的な牌匾業をこの工房の人々は展開しているのである。

【丁家の人々】 以上、この工房の彫刻業としての側面について記したが、最後に丁家の人々のこれ以外の側面について記しておこう。「漢字文化の継承と発展」の問題として丁家のこの家業を考えるに当たってはこの点を抜きにはできないと思われる。

まず記しておきたいことは、丁さんの兄弟はすべて家業に関わっているわけではないことである。すなわち、丁さんのすぐ下の弟丁偉盛氏は、中学卒業後一時家業に就いたものの、興味を覚えず他の仕事に転じ、現在は自家用の車による工業製品の訪問販売の仕事をしている。そして、その営業範囲はマラッカを中心とする30~50キロ圏で、日帰りし、母および、私が工房で会った下の弟(丁偉興氏)と共に、工房の二階に住んでいる。これに対して、丁さん夫妻は、1999年の結婚を機にこの工房から車で15分ほどの郊外のマンションに転居し、別の世帯をかまえ、2003年に購入した愛

車のニッサン SENTRA で工房に通ってきている。

なお、奥さんの実家はマラッカの中心部から車で約1時間ほどの町 Pondok Batang（ポンドク・バタン、木閣新村）であり、丁さんとは丁さんの友人とスポーツを介して出会っての恋愛結婚である。父親は彼女が結婚する前に亡くなっていて、母親は今も同所で雑貨商を営んでいる。この職業は祖父の代からのものである。祖父と両親はマラッカ生まれだが、祖母だけは中国の出身である。

神卓（卓）に祀られている3つの神像は、真ん中が「協天大帝」、右側が「観世音菩薩」、左側が「福德正神」で、協天大帝と福德正神はそれぞれ関帝聖君、大伯公とも呼ばれている。協天大帝・関帝聖君とは関羽のことである。協天大帝は民間信仰の商売の神、福德正神は道教の神であるが、丁さんの家族は関羽を正しい道を導いてくれる人格者として敬っている。「香と果物をいつもお供えし、朝晩1回ずつ家族の皆で拝む」という。心安らぐ話であると同時に、この工房について記す際に見逃してならないことである。のみならず、排屋の柱壁や玄関脇にも設けられて、この地の中国人の精神世界の一端を窺わせる神卓（図11）にも通じるものである。

なお、丁さんまで3代にわたって続けられてきたこの家業が、今、発展をしている中で、次の代に継続されるのかどうかは丁家にとって重要な問題である。この点に関しては、6歳の長男を筆頭に1男3女を数える子供たちがこの家業を継ぐかどうかは——自分たちとしては望みはしているものの——、家業に興味を抱くかどうか、また、忍耐力を含めて適性があるかどうかより重要だと丁さん夫妻は考えている。ここにも家よりも個人を重視する考え方にたっていることがうかがえる。丁さんの家業も丁さんの生活も伝統と革新の関わり合いの中にある^(注15)。

(注1) 平松幸三、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究(A)「ヤンゴン—ハノイ」トランセクトにおける生態環境の履歴

(注2) 武田秀夫「中国古代の市の世界とマラッカ」、奥田尚ほか『アジアの市場（いちば）の現状と背景（2004年度追手門学院大学共同研究研究成果報告書）』2005、所収

(注3) Isabella L. Bird (Mrs. Bishop). *The Golden Chersonese and the Way Thither*, London, John Mur-

ray, 1883

(注4) ポルトガル人の末裔が集住する地区 (Portuguese settlement)。スタダイスの東約3 km に立地。

(注5) Urban Solutions. *Forum on Shared Built Heritage City of Melaka*, Malaysia, 2004

(注6) Wendy Khadijah Moore. *Malaysia: A Pictorial History, 1400-2003*, Kuala Lumpur, Archipelago Press, 2005

(注7) Mrs. J. F. Bishop (Isabella Bird). *The Yangtze Valley and Beyond*. London, John Murray, 1899 (金坂清則訳『中国奥地紀行1』平凡社, 2002)。

(注8) 池莉『老武汉』江苏美术出版社, 1999

(注9) 宮尾しげを著、宮尾慈良・宮尾與男編注『彩色中国看板図譜——一九三〇年代の街路風物——』図書刊行会, 2004。なお、日本の看板にもこのような絵画的表現を主とするものがなかったわけではない。

(注10) この名称は2000年に、小型の作品を強調するために新たに定め、登録したものである。ただし、正式名称は今も福章彫刻貿易である。

(注11) 福建省西南縁の都市

(注12) ごく最近そのうちの1人は辞めた。

(注13) 字形が整然とし筆法の力強さを特徴とし、後世の書道の手本の一つとなった、北魏の石碑の文字。ここではその書体。

(注14) 原本については京都大学総合博物館永益英敏准教授のご教示をいただいた。記して御礼申し上げます。

I. H. Burkill. *A Dictionary of the Economic Products of the Malay Peninsula*, Vol. I, Vol. II, Ministry of Agriculture and Co-operatives, Kuala Lumpur 1966. I. Soerianegara and R. H. M. J. Lemmens eds. *Plant Resources of South-East Asia*, No.5(1), Bogor Indonesia, 1994. 熱帯植物研究会『熱帯植物要覧』養賢堂, 1993. 堀田満編『世界有用植物事典』平凡社, 1989

(注15) この工房の実態をもっと詳しく考察できれば、それは私がトルコでいくつかの家族を対象として進めつつあり、一定の評価を得ている、個人・家族・拡大家族レベルでのライフヒストリーと関わらせた地理学からの新しい人口移動研究としても展開できると思われる（金坂清則：マクロ・ミクロ二つのレベルでみたトルコの人口移動、石川義孝編著『アジア太平洋地域の人口移動』明石書店, 2005所収。同書に関する早瀬保子さんと井上孝氏の書評〈人口学研究36-5, 2005, 地理学評論79-4, 2006〉。

謝辞 本稿作成にあたり、丁偉強、鄭桂珍ご夫妻ほか福章彫刻貿易の皆様にはたいへんお世話になりました。ご厚情に対して、心より御礼申し上げます。

Chinese Characters
and Culture



発行日 2007年7月31日
発行者 文部科学省21世紀 COE プログラム
「東アジアにおける人文情報学研究教育拠点—漢字文化の全き継承と発展のために—」
住 所 〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47 京都大学人文科学研究所
電 話 075-753-6997 FAX 075-753-6999
e-mail coe@zinbun.kyoto-u.ac.jp • Web Site <http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

